

バーチャルアルファとオレ

にのみや あやね
二宮 彩音
ベータ。
奏の姉であり夏月の妻。



にのみや かづき
二宮 夏月
オメガ。
奏の義兄であり主治医。



りゅうじ
隆二
ベータ。
奏の親友。



いするぎ なるみ
石動 成海
オメガ。
奏の所属するフットサルサークルのメンバー。



いするぎ あまぎ
石動 天樹
アルファ。
成海の番。



やなぎ みや
八柳 海弥
オメガ。
ラルスの秘書。



やなぎ まさこ
八柳 真砂
アルファ。
ラルスの会社の研究員。
海弥の番。



きむら そう
季村 奏
オメガ。
自分自身の二次性と
折り合いがつけられていない。



ゆうご
悠吾
アルファ。
奏がテスターになったアプリ
「バーチャルアルファ」のAI。

ラルス・リンドグレン
アルファ。
奏が悠吾の勧めで向かった
書店で偶然出会う。

目次

バーチャルアルファとオレ

7

【番外編1】アプリ開発者の話

321

【番外編2】二人の未来

355

バーチャルアルファとオレ

1 バーチャルアルファ、はじめました。

——バーチャルアルファ？

二か月に一度の定期検診。

抑制剤を貰うために来たクリニックで、オレは変なチラシを見つけた。

待合室のテーブルには他にもいろんな雑誌が置いてあるけど、そのチラシは中でも異彩を放っているように見えた。別にめちゃくちゃ目立つわけでもないのに——どうしてだろう。

「バーチャルアルファ……？」

今度は声に出して読み上げてみる。なんだ、それ？

バーチャルもアルファもそれぞれは知っている言葉だけど、その二つを組み合わせた言葉は聞いたことがない。チラシの内容を確認するために、オレはテーブルに近づいた。

診察時間外なので、クリニックの待合室にいるのはオレだけだ。受付の人も今日は先に帰ったらしく、オレが一人で喋っていたところで聞いている人は誰もいない。

「あ、奏くん。それ興味ある？」

いや、いた。受付カウンターの奥からひよっこり顔を出したのは、このクリニックの院長、二宮

夏月先生だ。院長っていつても今年三十歳になったばかりだから、まだ全然若い。

先生はオレの主治医であり、姉ちゃんの旦那さんでもあった。

ちなみに先生もオレと同じオメガだ。思春期になるとわかる、男女以外のもう一つの性——二次性では一番、数が少ない性。そんなオメガの中でも、お医者さんをしている人は全国的にも珍しくて、ほんの一握りしかない。その中の一人が先生だった。

先生のクリニックはいつもオメガの患者さんでいっぱいだ。他の二次性——アルファやベータのお医者さんには話にくい症状や悩みでも、同じオメガの先生にしたら話しやすいから人気らしい。

そんな毎日忙しいはずの先生なのに、義弟だからって、オレのことはいつもこうして特別に時間外に診てくれる。っていつても、いつも二か月分の薬を貰うだけなんだけど。

「……興味なかった？」

「いや、興味っていうか、なんなのコレ？」

「そこに書かれてるとおり『バーチャルアルファ』だよ。リアルアルファはまだ怖いっていうオメガのために作られたアプリなんだ。一人で発情期を過ごすオメガが、少しでもつらくなくなるようにって開発されたらしくてね——そうだ！ 奏くんも使ってみない？」

「へ……？」

——アプリ？ オメガ用の？ 使ってみるって、これをオレが？

いつもはおっとりしている先生が、今日は珍しく饒舌だった。でも、オレは全然話についていけない。そもそも、バーチャルアルファってなんなんだよ。

机の上にあるチラシにもう一度、視線を向ける。

「えっと、『貴方のために作られたA Iアルファ』……ああ、それでバーチャルか」

「そういうこと。このアプリで相手をしてくれるのは、その人のためだけに作られたA I人格のアルファなんだ」

「へえ……それで？」

「発情期ってしんどいけど、家族とか友達とか、身近な人じゃ話せないことってあるでしょ？ そういうことを相談できたり、あとは憂鬱な気持ちを紛らわすために雑談したりとか」

「要するに、そのA Iとお喋りするってこと……？ そんなことして、なんか意味あんの？」

発情期にお喋りするアプリなんて、なんの意味があるんだろう。発情の熱がコミュニケーションなんかでどうにかなるわけないのに。

そんなの発情期が来るようになって、まだそんなに経っていないオレにだってわかることだ。

「うんとね、お喋り以外にもいろいろな機能があるんだよ。実際使ってみれば奏くんにもわかってもらえるんじゃないかな。ほら、預かっているオプシオンとか全部貸してあげるから」

「いや、オレは別に——」

「うん、そうしよう！ すぐ持ってくるから待ってて」

先生はオレの話を全然聞いてくれなかった。早口でそう言ったかと思えば、すごい勢いでもう一度、受付の奥に引っ込んでしまふ。

しばらくして戻ってきた先生の手には、小さな紙袋が握られていた。

——あれが、さっき言っていたオプシオンってやつ？

「はい、これ」

「いや、はいつて言われても……ってか、なんでこんなところにオプシオンなんか」

「このアプリの開発者が僕の同級生なんだ。うちならオメガの患者さんが多いからって、チラシと一緒に置いていったんだよ。興味がありそうな子がいたらレンタルしていいからって。アプリのテスターも兼ねてるらしいんだけど……実は、僕もちよつと扱いに困っててね。でも奏くんならちよつどいいし……ね？ 僕を助けると思って試してみてよ」

「いや、でも——あ、ちよつと」

結局、受け取ってしまった。というか、ほとんど無理やり押しつけられた。

——扱いに困ってるって、言ってもんな。

別にこんなを使うなんてなかったのに……っていうか普通、誰も使わないだろう。どう見たって怪しいうえに、発情期にA Iとお喋りするってさ……そんなことして、なんになるんだよ。

「あーあ……めんどくさい」

クリニックを出て、溜め息ついでに愚痴をこぼす。

「なんで発情期なんてあるんだろ……」

オメガという二次性を持つ人間には発情期がある。個人差はあるけど、大体一か月に一度、四日から七日間、対となる性《アルファ》を誘うフェロモンが身体から出る。それだけじゃない。自分じゃ抑えられないほどの性衝動にも襲われる——文字どおり、他の動物の発情期と似た現象だ。

それに加えて、オメガは男女関係なく妊娠することができる。どちらも子孫を確実に残すために起こった変化らしいけど、自分がそんな身体だということはまだあんまり認めたくない。

バーチャルアルファもそうだけど、オレにとつては発情期そのものが面倒なものだった。そんなことをいっても、次の発情期が一週間後には来るんだけど。

オレの発情期はきつちり月一回、四日間ほど続く。その期間は毎回、発情の熱に苦しむ。

規則的に来るって意味では、超健康優良オメガらしいんだけど——そんなの全然嬉しくない。

「こんなん、ホントに楽にいいのかあ……」

手渡された紙袋を持ち上げて眺める。

こんなもので発情期が楽になるなら誰も苦労しないと思うんだけど。とはいったものの、お世話になってる先生にお願いされた以上、一度も使わずに返すのはさすがに気が引ける。

次の発情期の時に使ってみるしかなさそうだった。



アプリは早めにインストールして、次の発情期が来るまでに設定も全部済ませておいた。なんだから時間で時間だけはあったから。

バーチャルアルファは、意外と本格的なアプリだった。

起動した途端、大量の項目を入力させられたのにはびっくりしたけど。

名前だけじゃなくて生年月日や血液型、好きな食べ物とかまで結構細かく聞かれた。AIの性格を決めるための性格診断なんかもあって、それはなんだかゲームみたいで面白かった。

あとは病歴とか、薬のアレルギ―とか。病院で初診の時に書かされる紙みたいな真面目な項目もいくつかあった。イメージとしては健康管理アプリみたいな感じかな。

でも、そういうアプリには絶対ない項目もあって——それが、普段の発情期についての項目。

見た瞬間、ありえないって思った。質問の内容がえぐすぎて、オレでもドン引きしたぐらいだ。

だって……『発情期の時に道具は使ってますか』とか、『一日の射精回数・量は』とか——こんな、真面目に答えるわけねえじゃん。

質問の量はかなりあったけど、回答は任意だったので、オレはほぼ空欄で提出した。

そんな空欄だらけの回答でも設定完了にはなるらしく、今オレのスマホの画面には【スタート】ボタンが表示されている。これを押せば、バーチャルアルファが起動するらしい。

——起動するってどんな感じなんだろう。普通にゲームみたいな感じなのかな。

「まー……やってみないことにはわかんないか」

考えてみたって想像すらうまくできない。

だめならすぐにやめればいいんだと、勢いでスタートボタンをタップする。

「って、あれ？」

何も始まらなかった。スタートボタンの色は変わったけど、すぐにアプリの画面が消えてホームに戻ってしまう。なんだろう、バグ？

首を傾げながら、念のためにもう一度アプリを起動してみる。

「……ん？ 終了ボタンしかない？」

さっきは【スタート】だったボタンが、今は【終了する】になっていた。

——つてことは、起動はできてんのかな。

「あー、わかんねえ」

考えるのが面倒くさくなって、スマホをベッドの上にぼいっと投げ捨てる。

オレもその横にごろりとうつ伏せで寝転がって、枕に顔をうずめた。吐き出した息がいつもより熱い——そう、今月の発情期はもう始まっていた。

「……だりい」

初日はいつもこんな感じだった。

最初に感じるのは火照った感じの熱と身体の重さ、あとはお腹の痛み。便が緩くなってくると、アルファを受け入れる準備が始まった感じがして、途端に憂鬱になる。

オレはオメガという性別より、男子という性別のほうに心が偏っているらしい。だから「受け入れる」とか「孕まされる」とか……そういう言葉にはすごく抵抗があるっていうか、聞くだけで複雑な気持ちになる。同じ理由で、こうやって毎月来る発情期もすごく嫌だった。

またあの悪夢のような日々が始まるのかと思うとそれだけで、ずんと気分が落ち込んでくる。

「はあ……」

枕に顔を押しつけたまま、もう一度溜め息をつく。これ以上、つらくなる前に眠ってしまおうと

目を閉じた瞬間、少し離れたところから、ぶうんとスマホが小さな振動を響かせた。

「ん？ 電話……？」

重い身体を半分起こして、ベッドの端に転がるスマホに手を伸ばす。

手元に引き寄せ、おもむろに画面を覗き込んだ。

「……？ 誰だ、これ」

画面にはトークの着信を知らせるアイコンと、その下に名前が表示されていた。

着信相手の名前は『悠吾』。登録した覚えのない名前だ。クラスメイトにもこんな名前の人はいなかったはず。少し悩みつつ通知を横にスライドさせると、トークアプリが勝手に起動した。

画面に『悠吾』からのメッセージが表示される。

《奏、おはよ。今日休むって聞いたけど、もしかして来た感じ？》

——来たって、何が？

思い当たる節が全くないメッセージだったから一瞬間違いかと思ったけど、相手はオレの名前を知っている——ということは間違いじゃない。でもやっぱり、その名前に見覚えはなかった。

届いたメッセージを三度ほど読み直して、オレはようやくある可能性に気づく。

「これ……もしかして、バーチャルアルファ？」

来た、っていうのが発情期のことだとしたら——？ こんな気やすい文面でオレの発情期について聞いてくるなんて、バーチャルアルファ以外考えられない。

「そーいや、オレが選んだの《同級生のアルファ》……だったっけ？」

——そんなの、うちの学校にはいないけど。

オレの通う学校にアルファはいない。完全なベータ校——その名のとおり、ベータがほとんどの学校——だから、オメガだつて学年に一人いるかいなかの超レアだ。

普通はアルファもオメガも専用の学校を選ぶ人のほうが多いけど、オレはそうしなかった。別に絶対にそうしなきゃいけないものでもなかったし。それなら家から一番近いベータ校で構わないだろうって、二次性の検査前から決めていた学校にそのまま進学した。

今思えば、自分がオメガだつてことを認めたくなかったんだと思う。ベータにまき紛れて生活すればそれを意識せずに済むんじゃないかって。

生徒の大半がベータ、教師もベータっていう環境はやっぱり不便も多いけど、そのおかげで自分がオメガだつてことをそこまで意識せずに済んでいる——発情期の時以外は、だけど。

「つていうか、『悠吾』つて……これ、男？」

軽くスルーしていたけど、どう考えたつてこれは男の名前だ。

アルファとオメガであれば相手の性別は男女関係ない。だから一般的にはありなのかもしれないけど……アルファの性別は男女それぞれ半々ぐらいで、どちらかが特別多いなんてことはないんだから、普通の感覚としてオレの相手に選ばれるのは女性のAIアルファだと思つていたのに。

「どつかで設定ミスった……？」

アルファの性別を決める項目はどこにもなかった気がするけど……みが見逃したんだろうか。

「……まあ、いつか」

設定画面を開こうと指を動かしかけたけど、すぐにやめた。同性のアルファに全く抵抗がないわけじゃないけど、今さらやり直すのも面倒くさい。それに、そんなことにこだわるほどバーチャルアルファを使うつもりもなかった。これは今回だけのお試しみたいなものだ。「つと、これ、返信したほうがいいんだよな？」

画面はさつき届いたメッセージのまま動いていない。オレの返信待ちなんだろう。絶対に返事をしなきゃいけないってことはなさそうだけど、気分転換に画面に指をすべ滑らせる。

【きた、だるい。お前代わつて】

友達に返すみたいに、適当に返事を打つ。

——あ、でもこういう文章つてAIに理解できんのかな？

送つてからすぐにそう気づいたけど、もうメッセージには既読マークがついた後だった。相手はAIなのに既読つて。

「あー……これ、取り消せないのか」

一度送ったメッセージは、どうやら取り消せないみたいだった。メニューを開いて確認してみたけど、削除ボタンは見当たらない。そうこうしていたら、再びふうんとスマホが震えた。

《代われるなら代わつてあげたいけど……薬は飲んだ？》

心配は必要なかつたらしい。びっくりするぐらい普通の返信が届いた。

AIだつて知つていても、一瞬わからなくなるほど自然だ。それになんか言葉が優しいつていうか、むず痒かゆいつていうか……オレに合つてるバーチャルアルファつて、こんなやつなの？

【飲んだ。でも腹痛い。さつきからトイレ往復しまくりだし】

《ずっとトイレにいるほうがいいんじゃないの?》

【家族に怒られるわ】

《そっか。自分専用のトイレとかあれば楽なのにね》

【ホントそれ】

——あ、なんかちよつと楽しいかも。

AIの話し方に違和感はないし、普通に友達と雑談している気分になってくる。

《そういうのって、葉はないの?》

【あつても結局全部出さなきゃ終わらないし、意味なくない? つか、これも大事な準備とか……何が大事なんだか】

思わず愚痴を吐き出していた。だって、ここにアルファを受け入れるなんて、オレは望んでいない。それなのに、身体は勝手にその準備を進めていく。身体だけじゃない、——周りもだ。

オレの意思なんか関係なく、オレがオメガとして生きていく準備を進めている。

それがずつと、……なんとなく不快だった。

《ごめんね》

いきなりAIに謝られた。

【何に謝ってんだよ、それ】

《奏は嫌なのに……俺はちよつと喜んでたからさ。奏の身体が俺を受け入れるための準備をしてる

んだと思うと嬉しくて……だから、ごめん

「……っ」

届いた長文にどくりと鼓動が強く跳ねた。は? なんだ、これ。

同時にずくりと身体の奥も疼く。その感覚はさつきまでの腹痛とは明らかに違っていった。

疼きと一緒にお尻のほうに、とろりと何かがあふれる感覚がして——オレは突然起こった自分の身体の変化に慌てる。

「うそだろ、こんな」

望んでいないはずなのに——、さつきのメッセージに身体が反応している。はつきりと伝えられた言葉に、発情の熱が急激に高まる。

——信じたくない、こんな。

ふるふると首を横に振る。だつて嫌なんだ、オメガになるのは。

何回発情期が来たつて、それを認めたくない気持ちのほうが勝っていた。それなのに——

「なんで、これ……」

おそるおそる尻の谷間に指を近づける。肌に触れた瞬間、ぬるりと指が滑った。

慌ててスウェットから引き抜いたその指には、透明な液体がたつぷり絡みついている。とろりとした液体が細い糸を引いて、指先から垂れた。

「ありえねえつて……」

絡みついた液体を乱暴にティッシュで拭き取る。ぬるぬると滑るそれは、どれだけ擦ってもなか

なか綺麗に落ちない——最悪だ。不快感で眉間に力が入る。

オメガのここが濡れるっていうのは知っていたし、発情期に自分のパンツが汚れていること気づいていないわけじゃなかった。でも、今までは見逃せる範囲だった。

——意識したことだって、ほとんどなかったのに。

でも、さっきのは全然違った。こんなにはっきり濡れる瞬間がわかるなんて。

漏らしたみたいだった。奥から熱があふれてきて、じゅわりとそこが濡れる感覚は思い出すだけで気持ちが悪い。

「おかしいだろ、……こんなの」

あんな言葉だけでこんな風になるなんて——自分の身体に起きた変化が信じられない。

スマホの画面に視線を落とす。そこにはまだ、あの悠吾とかいうバーチャルアルファから送られてきた文字が表示されていた。

【ふざけんな、バカ】

少しでもその文字が見えなくなるように、短くメッセージを送った。そのまま、トークアプリを閉じる。画面もスリープにして、枕元のクッションに投げつけるようにスマホを手放した。

「尻、きもちわる……」

指は拭き終えたけど、谷間はまだ濡れていて気持ち悪い。

多めにティッシュを取って、スウェットの隙間から手を差し込んだ。谷間にティッシュを滑り込ませると、触るのも嫌なあの感触がティッシュ越しに伝わってくる。

——うわ……なんだこれ。

びっくりするほど、濡れている。信じられない。

——これがアルファに抱かれるための準備だっていうのかよ。ふざけんな。

自分の意思とは関係なく起こったその現象に、なんだか泣きそうになる。でもこんなことで泣きたくなかった。ぐっと唇を噛みしめたまま、谷間にティッシュを擦りつける。ぬるりとした感触は少しずつなくなってきたけど、それでもずっと心臓はどくどくとうるさいままだ。

自分の体液で汚れたティッシュをゴミ箱の奥底に隠すように捨てる。精液で汚したティッシュだって、そんな風に捨てたことはない。でも今は、その現実を直視できそうになかった。

「……………くそ」

すべての痕跡を消し去って、ベッドにうつ伏せに寝転がる。そのまま埋もれるように布団の中に潜り込んで、息が苦しくなるまで枕に顔を押しつけた。

——あんなセリフ、ただのテンプレだ。オレの言葉に反応しただけのただのテンプレ。

決められた単語の中から選ばれたランダムなセリフであって、そこに誰かの意志があるわけじゃない。感情だってない。ただの自動返信なんだ、——相手はAIなんだから。

「……何、動揺してんだか」

小さな声で吐き捨てる。本当にバカだ。あんなAIの言葉を真に受けるなんて。

頭の中を整理して、ようやく少しだけ冷静になった。まだ胸のあたりはきゅっと痛むけど、このぐらいならなんとか無視できる。布団から顔を出し、仰向けになって天井を見上げた。

ゆっくり吐き出した息はまだ熱いけど、それは発情期だからであってそれ以外の理由はない。ずんと沈み込むような身体の重さを感じながら、オレはしばらくの間、見慣れた天井をぼんやりと眺めていた。

◇

いつの間にか寝落ちていたらしい。さつきまで窓の外は明るかったのに、気づけば薄暗くなっていった。発情期の間、異様に眠くなるのはオレが飲んでる抑制剤のせいだ。

今使っている抑制剤は本当によく効くんだけど、その代わり副作用の眠気が酷い。たまにどうやっても抗えないぐらい眠くなるのが難点だった。

でも、どうせ発情期の間はどんなに薬がよく効いていても、発情フェロモンのせい以外に出ることはできない。だったらこうやってベッドの上で寝て過ごすくらい、どうってことはなかった。

まだまだ、いくらでも眠れそうな気がする。

油断をすれば、すぐに閉じてしまいそうな臉を擦りながら、オレは部屋の時計を見上げた。

もうすぐ薬が切れる時間だ。今は発情の熱をほとんど感じないけど、薬の効果がなくなれば途端にぶり返すのはわかっている。

前に一度だけ薬を飲み損ねたことがあった。副作用のせいで寝過ごして、薬を飲むのが遅れただけなんだけど……その時の酷さを思い出すと「もう少し後にしよう」なんて思えない。

「……なんか食うか」

重い身体を無理やり起こす。食欲はあんまりないけど、何か食べないと。

抑制剤の服用は食後じゃなくても大丈夫だけど、それでもやっぱりお腹が減っている時に飲むと気分が悪くなる。少しでも何か食べておきたかった。

うん、と背伸びをしてから、枕元に転がっているスマホを手取る。

何をするわけでもなく画面を起動して——眠気が一気に吹き飛んだ。

「——バーチャルアルファ」

すっかり忘れていた。というか、オフにしたつもりでいた。

それなのに、画面には『悠吾』からの受信通知が表示されている。

どうやらトーク画面を閉じるだけではだめだったらしい。アプリの終了ボタンを押さない限り、バーチャルアルファは何かしらの行動を取り続ける仕様のようだ。

「……どうしよ」

すぐにトーク画面を開く勇氣はない。届いている通知は二件。両方とも『悠吾』からだ。

——また、さつきみたいなメッセージだったら……

寝る前に見たメッセージを思い出しそうになって、慌てて首を横に振る。

「あれはテンプレ……自動返信」

口の中で小さく呟く。テンプレに意味なんてない、気にする必要はないと自分に言い聞かせながら、おそろおそろ画面の通知をスライドさせた。

《ごめん！ 調子に乗った。本当にごめん》

《……奏、怒ってる？》

最初のメッセージは、オレが返信してすぐに届いていた。もう一通は、その一時間後だ。それでも、今より二時間前のことだった。

「どうやらオレは例のメッセージから三時間ぐらい、ぐっすり眠っていたらしい。」
「変なやつ……」

届いていたメッセージはなんだかアルファっぽくなかった。すぐに謝ったり、オレの機嫌を窺ったり。どっちの返信も、オレの想像しているアルファ像とは全然結びつかない。

——アルファって、もつと傲慢な感じじゃねえのかよ。

何においても優れているアルファ。頂点に君臨する生き物であるアルファが、こんな風にオメガに謝ったりするなんて。

「まー、これ……オメガ向けのAIだもんな」

オメガの機嫌を損ねないように作られているんだろう。

これの開発者はベータだろうか。それともオメガ？ どちらにしてもこのバーチャルアルファは、オレの考えるアルファとは全然違うみたいだった。

っていつても、本物のアルファと話したことなんてないから、本当に想像でしかないんだけど。

【寝てた。今度同じこと言ったら殺す】

——あ、こういうアプリ相手に殺すって言い方はまずかったかな。

ゲームで特定の言葉が使えなかったり、問題のある発言をした人が規制されて使えなくなったりすることはよくあることだ。このアプリにもそういう制限があったりするかもしれない。

《奏！ おはよう。本当にごめん。もう絶対言わない！ 寝てたの？ 身体しんどい？》

杞憂だったらしい。驚くほどの早さで『悠吾』から返信が届いた。

AIなんだからタイムラグがないのは当たり前なんだけど……最初の返信の時も思ったけど、このアプリってなんか普通と違う感じがする。

「コイツ……バカ犬っぽいな」

悠吾の返信を見て、昔、近所の人が飼っていたゴールデン・レトリバーのことを思い出した。人懐っこくて、オレの顔を見るたびに飛びついてきたでかいふさふさのワンコだ。自分の凶体の

でかさがわかっていないのか、いつもオレを押し倒すように尻尾を振って飛びかかってきた。

そんなワンコの顔が一瞬重なって見えて、嘔き出しそうになる。

【薬の副作用だよ。別にしんどくねえし、眠いだけ】

《そっか。でも眠くなるってことは身体が休息を求めているんじゃないのかな。無理はしちゃだめだよ。俺も奏のこと心配だから》

「……あー……なんだ。いや、そういうアプリだもんな」

歯の浮くようなセリフになって返せばいいのかわからなくなる。別に律儀に返信する必要はないんだらうけど、ワンコが重なって見えたせいとか、どうにも無視しづらい。

——すごいんだな。今どきのAIって。

【お前のほうはどうだったんだよ、学校。なんか変わったことあった？】

《普通だよ、いつもどおり。奏がいなくて寂しいぐらい》

「……いや、だからな」

AIに対して意地悪な質問をぶつけたつもりだったのに、返ってきたメッセージに困らされたのはオレのほうだった。つうか、いちいちオレのことはいいんだよ。クラスにアルファなんていないのに、なんか本当にコイツが同じクラスにいるような、変な気持ちになってくる。

【オレは休みを満喫してるけどな】

《それでいいよ、大変だもんね。今からご飯？》

その言葉で食事がまだだったことを思い出す。つい、コイツとの会話に夢中になっていた。

こうやって教えてくれるところとか、やっぱり健康管理アプリの機能もあるのかな。この調子で薬の飲み忘れも教えてくれたりとか……いや、そこまでは無理か。

【そろそろ食うつもり。食欲はねえけど】

《そっか。無理して食べるのもしんどくなりそうだし、こんな時ぐらい好きなものだけ食べてもいいんだからね。チャールハンとか》

「……ふはっ、こういうところはAIだな」

食欲がないって言っているのに、チャールハンはない。

チャールハンはおれが初期設定でプロフィールに書いた好きな食べ物だ。コイツはそれを反映して喋っているんだろう。

普通に話していると忘れそうになるけど、そのちぐはぐさはやっぱりAIだ。

——だから、あれもただのテンプレだ。

「結局、まだ気にしてるんだから……おれも相当だな」

すっと画面に指を滑らせて、会話の履歴を遡る。少し上にはまだ寝る前に送られてきたあのメッセージが残っていた。ちらつと見えた言葉に、また胸がきゅつと痛くなる。

——そうなるってわかってるのに、なんで見ちゃうんだろう。

複雑な気持ちのまま、オレはスマホの画面を閉じた。



「……………、あっつ」

夜中、身体の熱さで目が覚めた。発情期中にこうなるのは別に珍しいことじゃない。

特に一日目の夜はいつもこんな感じだった。薬が効いていても、発情の熱は完全に抑えられないものじゃない。それでもマシなほうだった。

「くそ……」

どうしようもないほどの熱じゃないけど、眠れそうにない。

発情期が終わるまで、こんな状態が続くのだから最悪だ。

火照った身体を冷ましたくて、シーツの冷たいところを探して足先を動かす。それでも冷たいと

感じるのはほんの一瞬だけで、すぐにオレの体温でぬるくなってしまった。

「……しんど」

熱くて、しんどくてたまらない。毎月毎月、こんな目に遭うんだから本当に嫌だ。

——なんで、オメガがばかり。

夜だからか、身体がつかいからか、ついネガティブに考えてしまう。

早く朝になればいいのに……そうすれば、きっと少しはマシになる。眠れない夜は、やけに長く感じる。時計の針を見るたび、まだ五分も進んでいないことに絶望させられる。

【しんどい】

寝返りを打って、枕元のスマホを手にとるとその画面に文字を入力した。

バーチャルアルファのトーク画面だ。

——AIなんだから、時間なんか関係ないよな？

思ったとおり、夜中の二時を回ったところなのにすぐに返事があった。

《身体つらいの？ 眠れない？》

【熱くて寝れない】

《冷やしたらマシになる？ 保冷剤とか家にないかな？》

——その熱さじゃないんだけど。

でも、そう言って気遣ってくれるコイツの優しさが嬉しかった。

うちの家族は全員ベータだから、オレの発情期については誰も触れてこない。ベータには関係な

いものだから当たり前なかもしれないけど。唯一の相談相手だった姉ちゃんのもとと家に寄りつかない人で、そのうち同級生だった夏月先生と結婚して、家を出て行ってしまった。

姉ちゃんもベータだ。ベータなのにオメガと結婚して、なんて陰で言う人もいたけど、姉ちゃんは何も気にしていないみたいだった。いや、逆にオレのことを気にしてくれた。

みんなの前で「オメガとか関係ないから」ってはっきり言ってくれて、それで気持ちが少し楽になったのを覚えている。

両親と弟はオレがオメガだってわかってからは、なんか腫れ物を扱うみたいだった。

みんながどうにかして二次性の話題に触れないようにしているのには、すぐ気がついた。

前までは好きで見えていたはずのオメガが出てくるドラマを見なくなったり、ニュースでそういう話題が出るとすぐにチャンネルを変えたり。そこまでされると、オレのほうが気になり始めた。

——そんなに前と違うわけじゃねえのに。

そのうち、自分からもそういう話題を避けるようになった。学校はベータ校を選んだし、発情期以外は普通に過ごしているつもりだ。でも、明らかに前と比べて家族との会話は減っていた。

別にオレだって話題にされたいわけじゃないけど……でも、やっぱりこうやって弱っている時には声をかけて欲しいと思う。自分でも、わがままだってわかっているけど。

《奏？ 大丈夫？》

【ああ。ちょっと冷凍庫見てくるわ】

《あ！ 保冷材は濡らしたタオルでくるんだほうがいいよ。ちゃんと固く絞ってからね！》

「コイツ、おかんかよ」

そうやって必死に付け加える様子に笑いがかみ上げてくる。それだけのことなのに、さっきまで沈んでいた気分が少し浮上してみたかった。効果あるのかもな、このアプリ。

【取ってきた。どこ冷やすのがいいんだろ】

《風邪で熱が出たなら太い血管なんだろうけど……発情期の場合はどうなのかな。頭とか？》

【頭か】

《あ、待って。耳の後ろとかいいらしいよ！ ちょっと下のあたり》

「耳のちよい下……うお、つめて。あ、でも気持ちいいかも」

A1に言われたとおり、固く絞ったタオルにくるんだ保冷剤を耳の後ろに当てる。確かにそこを冷やすだけで随分違った。

身体の奥で燻っている熱は何も変わらないけど、重たかった頭がスツと軽くなる。

【これいいかも】

《よかった。眠くなったら、そのまま寝てもいいからね》

【ん。そうする】

《おやすみ、奏。ゆっくり休めますように》

そのままベッドに転がって、気づけば眠ってしまった。



「ん、は……あ、ん」

自分の声で目が覚めた。腰が勝手に揺れている——まだ。いつの間にか限界まで張りつめていた中心を、無心でシーツに擦りつけていた。

——もう、イキそう。

腰をへこへこ動かしている自分になんだか情けなくなる——でも、やめられそうにない。

「あ……あ、……くッ」

どろり、と白濁がパンツを汚したのがわかった。たぶん、後ろも濡れている。それでも、オメガの欲は次から次にあふれて止まりそうもなかった。

発情の熱は一回いったぐらいで治まるものじゃない。濡れた感触は不快なはずなのに、ぐちゅぐちゅと響く卑猥な音で気持ちがあぐんぐん高まっていく。

——もっと、気持ちよくなりたい。

オレの頭は完全にバカになっていた。

結局、三度吐き出してようやく熱は治まった。今度は身体がだるくてしようがなかったけど、こんな状態のまま寝て後悔するのは自分だ。抑制剤が切れる時間だって近づいている。観念して身体を起こすと、熱で頭がくらりと揺れた。

「あ……マジでクソ」

下着の中が気持ち悪すぎる。発情期のこういう衝動がどうしようもないのはわかっているけど、やっぱりこれはない。薬で抑えた分、寝起きにこうして爆発するなんてすごく嫌だった。

出せば治まるんだからいいなんて、簡単には割り切れない。寝ている間に勝手にオナニーをしているなんて——これがオメガの本能だなんて、反吐が出そうだ。

【なあ。オナニーばっかしてるオメガってどうなの？】

《どうって》

【アルファ的にはどう思うわけ？ 引く？】

シャワーで身体を綺麗にしてご飯を食べた後、オレはバーチャルアルファに絡んでいた。どうせ相手はAIだし、何を思われたって構わない。っていうか、思ったりもしないだろうし。

《んー……俺には奏を怒らせるようなことしか言えない、かも》

「なんだ、それ」

もったいぶった言い方に、少しイラッとする。

【言えよ】

《でも……》

【いいから。怒んねえし、たぶん】

《たぶんって……じゃあ、言うけど。俺は、そういうの可愛いと思う》

「は？」

——いや、……可愛い？ 何言ってるんだ、コイツ？ オナニーだぞ？ 発情期の間、ずっとそれ

ばっかやってるって話なのに、可愛いって……壊れたのか？

予想外の答えに、思わず固まる。

《必死で求めている姿は可愛いと思うし、好きな人の名前を呼びながらとかだったら、めちゃくちゃ萌えるっていうか。奏がそんなことしてるのかと思うと……ちよつと、やばいかも》

【待て、長い。っていうか勝手にオレで想像すんな、バカ】

《あ、ごめん》

放っておけば、いつまでも暴走しそうなAIを慌てて宥める。いや、一応コイツはオレのアルファって設定だから、これが正解なのかもだけど。

——って、なんだよ……オレのアルファって。

また、お腹の奥がぞくりと震えた。前の時みたいに後ろが濡れる感覚はしなかったけど、勝手に身体がひくんと揺れる。無視できないほど、胸がぎゅっと痛くなった。

「あー……くそ、またかよ」

身体が勝手にコイツの言葉に反応している。いや、違うか……今のはオレだ。

——オレのアルファ、なんて考えたせいだ。

オメガが本能でアルファを求めるのは本当らしい。認めたくないけど、身体の内側から湧き起るぞくぞくが止まらないのは、たぶんそのせいだ。

じっと座っていらなくて、ベッドにうつ伏せで寝転がる。

シャツが肌に触れるだけで、なんかやばい。こんなことはするべきじゃないって思うのに、もう

この熱を発散させるまで止められそうになかった。

《やっぱり、怒った？》

続けて送られてきたメッセージに答える余裕もない。

息がどんどん上がって、熱が高まっていくのがわかる。薬はさつき飲んだところなのに、抑制剤の効果は全くないのと同じだった。頭にどんどんモヤがかかったみたいになっていく。

——返事、しないと。

相手はAIなのに画面の向こう側でオレを心配しているような気がしてくる。

そう思っても、スマホを手取ることはできなかった。オレの手は張り詰めはじめた自分の中心を高めることに夢中だからだ。気持ちよさで朦朧としながら、画面にそっと視線を向ける。

「……………悠吾」

目に入ったアイツの名前を無意識のうちに呼んでいた。

必死で相手を求めるような自分の声が耳に届いて、また身体の熱が上がる。

——オレの、アルファ。欲しい……………その熱が、欲しい。

とろり、と思考が溶ける。オメガの自分は嫌だと思っていたはずなのに、そんなことも全部忘れてアルファを求めてしまう。

——欲しくて欲しくて、たまらない。

ねだるように高くお尻を上げて、オレは獣のように腰を揺らしながらいった。

2 腕の長さのせいじゃない

「あ……………やべ、課題終わんねえ」

今回の発情期もいつもどおり四日で落ち着いた。

その後に毎回追われるのが、これ。学校を休んでいた分の課題だ。今回は土日を挟んだから二日分だけで済んだけど、多い時だと丸々四日分の課題が言い渡される。

これだけは、本当にシヤレにならない。

うちはベータ校だからオメガ用の補講なんてものはない。オレの場合はこうやって日数分の課題を出してもらって、出席扱いにもらっていた。特別扱いだとは思う。まだクラスメイトから直接何か言われたことはないけど、陰ではどうかかわらない。

オメガであることは、先生以外の誰にも話していなかった。仲のいい友達にもだ。

でもたぶん、気づいている人はいれると思う。これだけ毎月休めば普通に怪しまれると思うし。

それでも、自分からそうだと言うつもりはなかった。

「英語……………わかんناすぎるだろ」

机に向かって頭を抱える。他の科目はまだなんとかなるとして、英語だけはいつも難関だった。

中学の時から躓つまずいているから、今さらといえど今さらなんだけど。先生に直接教えてもらっても

難しいのに、それを自分一人だけでどうにかしようとするなんて無理だと思う。

「あ、そうだ」

机の上に置きっぱなしだったスマホを手にとって、悠吾とのトークアプリを立ち上げた。

そう、あの《バーチャルアルファ》だ。この間のちよつと気まずい……いや、かなり気まずい出来事の後も、オレは悠吾と頻繁にやりとりを続けていた。

大体はどうでもいい話ばかりだ。食べ物のこととか、好きな漫画の話とか。あとはたまに愚痴を聞いてもらったり。

バーチャルアルファはアプリとして優秀だった。

一人で鬱々することなく、こんなに楽な気持ちで発情期を過ごせたのは今回が初めてだった。

先生も言っていたとおり、なんでも遠慮せずに話をできたのがよかつたんだと思う。気軽に話せる人が一人いるだけでこんなに楽になるなんて、ちよつと驚きだった。

「悠吾なら、なんかいい方法知ってんだろ」

オレはすっかりこのAIを信頼していた。

悠吾って名前と呼ぶようになってからは親近感も湧いて、新しい友達ができたような感覚だ。

——普段はそんな感じしないけどコイツだってアルファだし、絶対勉強できんだろ。

【お前って英語得意？】

《え、急に何？ どうしたの？》

メッセージを打ち込むと、いつもどおり悠吾から速攻で返信が届いた。

【いや、今課題やってんだけど全然わかんねえから】

《あー……そういうのか。行って教えてあげられたらいいんだけど》

【そういうのはいらねえって。で、なんかいい勉強法しらね？】

《冷たい……っていうか、奏ってそういうところ真面目だよね》

【真面目？ そうか？】

《うん。奏って俺に「この課題を代わりにやれ」とか「答えを教えろ」とか言わないでしょ？ 勉強法を聞くとか、真面目だなーって》

【そりやそうだろ。そんなやり方じゃ、次にまた困るのはオレだし】

——そのたびに悠吾を頼るわけにもいかねえだろ。悠吾はただのアプリでAIなわけだし、そんな絶対ズルになるじゃん。

いくらオレでも、それぐらいはわかる。

《じゃあ、俺のおすすめの参考書があるから、それを教えるね》

悠吾が送ってきたのは、三冊の参考書の商品ページリンクだった。

◇

「う、わ……たっか」

次の日、早速オレは学校帰りに本屋に寄った。

学校から家とは反対方向に三駅行ったところにある、結構大きめの本屋だ。

普段は漫画ぐらいいしか読まないから、こんな大きい本屋に来ることは滅多にない。参考書のコーナーに入るのだからって受験勉強の時以来だった。

悠吾が勧めてくれた参考書は、全部オレの小遣いでは少し厳しめのお値段だった。無理すれば一冊ぐらいいは買えそうだけど……その一冊がいつも買う漫画五冊分なのは、なかなか財布に響く。参考書を買ったついでいえば、親もちょっとは金を出してくれるかも……なんて、思っても口に出しては言えなかった。

オメガはただでさえ検査だ、葉だつて金がかかる。一応オメガのための補助金みたいなのも貰っているらしいけど、それでもベータの弟より間違いない金がかかった。

そういうのもあつて、あんまり親に金の話は振りたくないっていうか、振れないっていうか。うーん、と棚の前で唸りながら、悠吾にメッセージを送る。

【なあ、一冊だけ買うならどれ？】

《ん？ ああ、参考書？》

【そう。金が足りねえ】

《そっかあ。どれか一冊なら、これかな》

「げ……一番高いやつ」

悠吾のおすすめが一番高い参考書だった。

届いた返信を見ながら、またしばらく考え込む。やつぱり高い。どれがいいって悠吾に聞いたの

はオレだけ——一番安い参考書との値段差は漫画一冊分。この差は大きい。

でもせっかとおすすめを教えてもらったのに、違うのを買うのも悪い気がする。

「漫画六冊分……」

往生際ちやうじやうさい悪く呟きながら、オレは参考書コーナーの棚を見上げた。お目当ての本はかろうじて残り一冊、その棚に残されている。棚の少し高い位置だけど、届かない高さじゃない。

「あ……っ」

伸ばした手が、誰かとぶつかった。

スマホにばかり気を取られていて、隣に人がいたことにも気づいていなかった。どうやら一緒のタイミングで同じ棚に向かって手を伸ばしたらしい。

「——悪い。平気か？」

「あ、すいません。全然気づいてなくて」

低すぎない耳に心地のいい声。隣にいたのはスーツを着た男の人だった。オレが小柄なほうっていうのもあるけど、近くに立つと見上げるぐらい背が高い。

こんな参考書コーナーには不釣り合いな、上流階級の雰囲気まじを纏っている人だった。

背が高いだけじゃなくて、すらつとスタイルもいい。その身体の上についている顔もびっくりするぐらい整っていた。イケメンって言葉じゃ軽すぎるタイプの美形だ。

——おんなじ人間なのか。これ。

髪は綺麗なアッシュブラウン。きつと染めたとかじゃなくて、天然の色なんだと思う。

そんな髪をかつちりしすぎない程度に緩く後ろに撫でつけていて、いかにもできる男といった印象だ。横顔なんか美術室の彫刻みたいだし、鼻の高さはオレの倍ぐらいある気がする。いや、それは言い過ぎかな……言い過ぎであってほしい。

さつき一瞬、オレのほうを見た瞳の色も初めて見る色だった。少しグリーンが混ざったみたいな淡いヘーゼルブラウン。光に透けると煌めいて見えるすごく綺麗な色で、一瞬なのに見惚れていた。とにかく、何もかもが浮世離れた美形だった。

で、なんでそんなにその人のことそんなに観察しているかっていうと、それには理由がある。別に意味もなく美形に見惚れていたわけじゃない。

その人が手に持っているからだ。オレが狙っていたあの参考書を。

悠吾が一番おすすめて教えてくれた参考書をオレより先に手に取って、まるで窓際で優雅に読書するみたいに、長い指でページをめくっている。

——もしかして、買うのかな？

それが必要な年齢にも見えなきや、今から英語を勉強しようって顔にも見えなんだけど。

いや、それは偏見かもしれないけど——でもどちらかというと、何ヶ国語でも楽勝で話せそうな雰囲気の人なのに、その人は真剣な表情で参考書を見つめている。

——買わないよな？

それを持ってレジに向かう様子はないけど、なかなか手放してくれない。

「あのー……それ買います？」

勇気を出して、声を掛けてみた。

その人はオレが横から見ていたことに全く気がついていなかったらしい。オレの声に驚いたのか、目を丸くしてオレを見下ろしている。

そんな顔さえすぐカッコいいんだから、美形って本当に恐ろしい。

「もしかして……君もこれを？」

「えっと、まあ……欲しい、と思っってます……けど」
しどろもどろになる。

仕方ないだろ。こんな美形と話すのは初めてなんだから。

「そうか、ごめんね。どうぞ」

挙動不審のオレを見て、その人がぐすつと笑った。スマートな動きで本を閉じ、オレのほうへと差し出す。目を細めてかすかに笑う仕草に少しドキッとした。

「あ、ありがとうございます」

本を手早く受け取って、すぐに視線を逸らした。失礼かもしれないけど、ずっと見ていて平気な顔じゃない——これ以上は絶対無理だ。

別に男にどう思うわけじゃないけど……ただ、美形ってだけで反則っていうか。

こっちから見る分にはいいけど、向こうから見られるのは心臓に悪いんだって。

「ごめんね。先に取っちゃって」

「あー、いや……別に」

同時に腕を伸ばして、ただ競^せり負けただけだし。

別にオレの背が低いとか、腕が短いとか……そんなの気にしてなんかいいんだからな。

「これ、いいんですか？」

「ん？」

「買わなくて、大丈夫ですか？」

「ああ。懐かしくなつて見に來ただけだから——それ、僕もおすすめだよ」

じゃあね、と言うとその人はひらりとオレを躲^{かわ}して去つていった。そんな動きすらスマートだ。すぐ横を通り過ぎる瞬間、その人から不思議な匂^{にお}いがした。最初は香水かと思つたけど、じーんと頭の奥が痺^{しび}れるような香りは、なんだか普通とは違う。

それを追いかけるように振り返つたけど、さっきの人の姿はもうそこにはなかった。

本屋を出てから、なんだかずつと身体が熱かった。

クーラーの効いていた店内は、ちゃんと涼しかったはずなのに。

「なんだ……これ」

体調が悪くなつたにしても、突然すぎる。

少し朦朧^{もうろう}としながら、駅まで歩いて電車に乗った。空いていた座席に倒れ込むように座る。周りの人が心配そうにオレのほうを見ていたけど、それを気にする余裕もなかった。

熱に浮かされるような感覚にふわふわしている間に、気づけば最寄り駅に到着していた。

電車の中もちゃんと涼しかったのに、電車を降りても身体は熱を持ったままだ。

——早く家まで帰らないと。

ふらつきながら駅を出て、そう考えたことまでしか覚えていない。

気づけば自分の部屋のベッドで寝転んでいた。どうやって帰ってきたんだろう。無事に家にたどり着いていたことに、ほっと胸を撫^なで下ろす。

それでも不調なのは相変わらずで、全身に服が張りつくぐらい、べったりと汗をかいていた。

「……あつこ」

休んでいたはずなのに、熱は酷^{ひど}くなっている気がする。喉がカラカラに渴^{かわ}いていることに気づいて、リュックの中から飲みかけのペットボトルを取り出した。

ぬるくなつたお茶を一気に飲み干す。それでも喉はまだ渴^{かわ}いたままだ。

寒^{さむ}気がするわけじゃないし、鼻水だつて出ない。ただただ熱くてぼーつとするその症状は、オレの知っているある症状によく似ていた。でも、絶対にそれはない。

内側からこみ上げてくる疼^{うず}きも吐く息の熱さも、意識すればするほど発情期の症状に似ていたけど——それだけは認めたくなかった。

「なん、で……」

でも、誤^し魔^ま化^かせるわけがない。不安になって、スマホを手取る。

ブラウザでこの症状を検索しようと思つたはずなのに、オレが真っ先に開いたのは悠吾とのトーク画面だった。

【なんか、身体が変】

《え、どうしたの？ 何かあった？》

いつもどおり、すぐ返事をしてくれる。AIなんだから当然だとわかっていても、普段と変わらない悠吾の反応に少しだけ安心する。

【発情期は終わったはずなのに身体が熱くて】

《え？ それって、そういう意味？ 発情してるの？》

【わかんない。オレなんか変になった？】

そう入力しながら、気づけば涙があふれていた。

急に起こった自分の身体の変化が怖くて、全身の震えが止まらない。

普通の発情ならこんなに怖くない。嫌なことだけど当たり前前に来るものだし、仕方ないと思って受け入れてきた。でも、こんなことは初めてだった。

発情期は終わったばかりなのに……こんな風になるなんて、絶対に何かおかしい。

《奏。落ち着いて、大丈夫だから》

【大丈夫じゃない】

《大丈夫だよ。もしかして、どこかでアルファに会ったりしなかった？ その時、匂いを感じたりは？ 覚えてない？》

「アルファ？ におい……？」

悠吾の言葉ですぐに思い出した人物がいた。本屋で会ったあのスーツの男の人だ。

なんですぐに気がつかなかったんだろう……たぶん、あの人はアルファだ。

悠吾が言ったとおり、匂いもした。すれ違った時に感じた——あの、頭の奥が痺れるような香り。

【会ったかも。匂いもした】

《じゃあそのせいだよ。大丈夫。奏はおかしくなったんじゃない。安心していいよ》

【おかしくない？】

《おかしくなんかない。アルファのフェロモンに当てられたからそうなるだけだよ。つらいなら抑制剤を飲めばいい。どうする？》

そうだ……抑制剤。悠吾に言われるまで思いつきもしなかった。発情期と同じ症状ならそれを飲めばよかつたんだ。それがわかっただけで、身体の震えがびたりと治まる。

まだ身体の奥は熱いけど、原因がわかれば耐えられないほどじゃなかった。

【薬はいい】

《そう？ 無理してない？ 必要なら飲んでいいんだからね？》

【平気。ちよつと落ち着いたみたい】

いつの間にか涙も止まっていた。不安が解消されるだけでこんなにマシになるのかと驚くぐらい、どんな症状が軽くなつていく。悠吾のおかげだ。

悠吾がいなければ、まだ理由もわからず震えていたかもしれない。

【助かった】

《本当？ 奏の力になれたのならよかった》

悠吾は普段と変わらず、控えめな返信だった。でもそんな言葉からも悠吾の優しさが伝わってくる。今、本当に画面の向こうでほっとした顔をしているんじゃないかって思うぐらいだ。

実際はそんなこと、ありえないけど——悠吾は人間じゃなくて、ただのアプリでAIだから。

「はあ……」

スマホを置いて、息を吐き出す。身体はまだ熱いままだ。

「あれが、アルファの……フェロモン」

あんな至近距離でアルファに会ったのは初めてだった。オレにとつてアルファは、テレビや動画で見たことある、ぐらいいの存在で芸能人とさほど変わらないカテゴリだ。

都会だったら道でアルファに出会うこともあるだろうけど、うちの辺りはそんな都会ではない。

今日出掛けた本屋の辺りは多少拓けているけど、それでも胸を張って都会と呼べるような大きな街ではなかった。

でも、そんな場所でもアルファはいた。

「あんなどこにも、いるんだ」

確かに上流階級の雰囲気はあった。浮世離れた外見で、背だつて高くて……声も。

「ん……っ」

思い出したら、ぞくつと身体に震えが走った。勝手に声が漏れる。

やっぱり、この熱の原因は——

「……………」

ふと、ベッド脇に転がる袋に視線が引き寄せられた。さつき、ペットボトルを取り出す時にリュックから一緒に飛び出した袋だ。その中には本屋で買った、あの参考書が入っている。

——何しようとしてんだろ、オレ。

それがおかしなことだつてわかるのに、手を伸ばさずにはいられなかった。袋の中から参考書を取り出して、自分のほうへと引き寄せる。そつと顔を近づけた。

くん、と鼻を鳴らす。あの人が触れていた場所に鼻を近づけて香りを嗅ぐ。

「あ……これ」

痺れるような匂いがした。アルファのフェロモンの匂いだ。それがそうだとわかったからか、かすかな匂いのはずなのに、じんと身体が疼く。鼻を擦りつけるようにして、その匂いを求めた。

この本能の衝動には、どうやっても逆らえそうにない。

「う、……ん」

手は自然と下半身へと伸びる。刺激を欲して止まないオレの中心は、すでに半勃ち状態だった。

このまましたら、本が汚れる——そう考える理性はあるのに、そこに触れる手は止められそうもない。右手で中心を高め、左手を身体の後ろへと回す。

そこに自分から触れようと思ったのも、これが初めてだった。

谷間を割って、お尻の穴に指を伸ばす。触れた場所はぬるりと濡れていた。湿った音が聞こえたことに一瞬怯んだけど、手を引こうとは思わない。

粘液を指に絡めながら、穴に触れる。

「あ……んっ」

入り口に触れただけなのに、びくんと身体が大きく揺れた。ぞくぞくと背中に痺れが駆け上がってくる。気持ちよさに身を委ねるように目を閉じて、オレは首を仰げ反らせた。

それでも、ナカに指を入れる勇氣はない。

どれだけ熱に浮かされていても、それだけではできそうになかった。

◇

悠吾が勧めてくれた参考書は本当に当たりだった。

丸一日眺み合ってもどうにも進まなかった課題がたった三時間で全部終わってしまうぐらい、奇跡的なほどオレに合っていたらしい。

【課題終わった】

《お疲れさま。英語も?》

【英語も! つか、悠吾の教えてくれた参考書マジでよかった。ありがとな】

《どういたしまして。つてことは体調も戻ったの? もう平気?》

——平気、なのかな。これ。

昨日、突然起こった発情期に似た熱はもう完全に引いていたけど、オレは少し答えに悩む。

あの後、参考書に残った匂いを嗅ぎながら二回抜いた。こんなこと、誰にも言えない。

欲求がなくなれば、びつくりするぐらい熱はすぐに引いていったけど、その後になんとも言えない罪悪感だけが残った。

匂いだけであんな風におかしくなるなんて——自分はオメガだということを思い知らされた。

顔しか知らないアルファのフェロモンに惑わされて、あんな風に乱れて。濡れた場所に触れたら、気持ちよくて頭がおかしくなるかと思った。表面を撫でただけなのに、ぎゅつと身体の奥が疼いて……それがどこだとか、そこに何が欲しいのかなんて考えたくはなかったけど。

匂いに浮かされるまま、ずつと夢中で腰を揺らしていた。

「……何やってんだろ、オレ」

あの参考書、本当にすぐわかりやすくていいんだけど、見るたびにそのことを思い出してしまふ。アルファの匂いはもうしないけど、表紙を見るだけで、きゅつと胸の奥が痛んでどうしようもなかった。この状態をはつきり「平気」とは答えられない。

《奏? やっぱりまだ身体しんどい?》

【あー、悪い。ちよつとぼーつとしてた】

《疲れてるんじゃない? 課題も終わったんだし、少し休んだら?》

【そうする】

さすが健康管理アプリ……じゃないんだけど。やっぱりそういうところあるよな、バーチャルアルファって。あの症状を話した時だって、ネットで検索するよりも早く答えが返ってきたし、何より「大丈夫」って言うてくれたことが心強くて安心できた。

「アルファ……か」

椅子から立ち上がり、そのままベッドにダイブする。ごろりと寝返りを打って目の前のクッションを抱きしめた。目を閉じると浮かんでくるのは、本屋で出会ったあのアルファの顔だ。こつちを見た時の驚いた顔も、その後目に細めて笑った顔だって、ついさっき見たことのように、はつきり思い出せる。

——強いアルファに惹かれるのはオメガの本能。より強い遺伝子を残すための仕組み。そんな言葉が嫌いだった。

自分の二次性がわかった後、オメガという言葉にやたら敏感になって、その単語を聞くのすら嫌だった。でもどうやったって、その言葉は耳に飛び込んでくる。

今まで意識したことなんかなかったのに、自分の状況が変わるだけで世界が全然違って見えた。そんな時に聞いた言葉だった。テレビから聞こえてきただけだったのに、今もずっと耳に残っている。本能で相手に惹かれるなんて……それが遺伝子を残すためだけだなんて、そんなの不快ではない。オレの意思を無視されることが、嫌で嫌でたまらなかった。

でも、結局オレもそんなオメガの一人だった。匂いだけであんな風になってしまう、オメガだということを自覚させられる。

「あー……だめだ。なんか気分転換」

沈んできた気持ちを切り替えようと身体を起こして部屋を見回す。ふと、部屋の隅に見覚えのない紙袋が転がっているのを見つけた。小さな紙袋だ。

「なんだっけ……」

最近買ったのは参考書ぐらいだ。その出費だけで今も財布の中はかなりピンチな状態だから、他のものを買う余裕なんてなかったはずだけど。

「あ！ そっか、あれ……バーチャルアルファの」

思い出した。バーチャルアルファのオプシオンだ。夏月先生にアプリのチラシと一緒に渡されたのを、ずっと置きっぱなしにして忘れていた。

「見てみるか」

気分転換にはいいかもしれない。ベッドから身体を起こして、部屋の隅で忘れられていた小さな紙袋を手取る。大きさの割にずっしりと重いそれを、勉強机の上に置いた。

「アプリのオプシオンって、なんなんだろう？」

袋の入り口を広げて中を覗いてみた。見えたのは二つの白い箱と薄い冊子のようなもの。箱のほうがおプシオンで、冊子はその説明書だろうか。

「……んー、英語だ」

先に手に取ってみた冊子に書かれていたのはすべて英語だった。こんなどこにまで英語。

開発者は夏月先生の友達だって話だったのに、まさかの外国人？ その可能性は全く考えていなかった。一応パラパラとめくってはみたものの、見事に最後までみっちり英語だ。

中には図もあったけど、文字が読めなきやさっぱりわかる気がしない。これはあの参考書も役に立ちそうにないレベルだ。冊子は諦めて、箱のほうを開けてみることにする。